



将来はベンチャー企業を支援する ベンチャーキャピタリストに

留学や留学生との交流で、多様な価値観と将来像を発見

●システム理工学部 4年次生
藤原 俊樹 さん

留学先のペンシルバニア大学でダイバーシティ(多様性)に触れ、早期に将来像を確立する重要性を体感した藤原さん。「ベンチャーキャピタルこそが日本経済を活性化させる」との信念を胸に、今春、外資系企業に活躍の場を移す。留学で「本当に自分がやりたいことが見つかった」と語る藤原さんの描く理想のリーダー像とは。

藤原 俊樹—ふじわら としき
■1994年、京都府舞鶴市生まれ。京都府立東舞鶴高等学校卒。システム理工学部4年次生。2年次の秋からペンシルバニア大学に留学。帰国後は南千里国際プラザ留学生寮に入寮し、留学生をサポートするレジデント・アシスタント、副寮長を務める。趣味は読書、ゴルフ。



頻りに顔を出す千里山キャンパスの国際部交流室で、留学を決意した理由や自身の変化について、端正な顔をほころばせながら話し始めた。

関西大学システム理工学部への進学、そして留学への意識は高校時代に芽生え始めた。「高校から本格的に週5日通うことになった塾が特殊で、受験には関係ないフィボナッチ数列や、海外留学の体験談などを講師が話していました」。黄金比と密接に関係するフィボナッチ数列の奥深さに衝撃を受けて理系への進学を決意し、海外留学体験談から刺激を受けて留学を志すようになった。「関西屈指の総合大学で、キャンパスも綺麗で広く、研究環境や留学制度が整っている関西大に入学しました。1年次生の時はアルバイトとサークルに明け暮れていましたが、2年次生の春に留学を決意し、秋から留学しました」。

関西大の認定留学推奨校の1つであるペンシルバニア大学での留学生活で、藤原さんは想定を超える収穫を得ることになった。1区画10カ国10人の留学生が住む国際寮に入寮し、語学を中心に「リーダーシップ論」「コンピュータサイエンス」などを受講。イギリス、ブラジル、スペイン、サウジアラビアなどのさまざまな国の留学生と共同生活し、英語で授業を受ける毎日。「彼らはみ



南千里国際プラザ留学生寮の仲間たち。共同生活を送りながら異文化交流ができる

な「私は将来こうなりたいから、今ここで勉強している」と明確な意思を持っていました。例えば、「ニューヨーク・タイムズ」の記者を目指していたり、親の会社を継ぐために経営学を学んでいた。中途半端な考えに対しては「なぜ? どうして?」と質問攻めに遭いましたね。ディスカッション中心の少人数講義では賛成・反対の立場から意見をぶつけ合い、政治・宗教の話では日本の国際的な立ち位置を再認識する契機になった。毎週金曜日に開催されるパーティーにも積極的に参加し、異文化に触れダイバーシティの重要性を体感する日々を過ごした。帰国後は南千里国際プラザ留学生寮に入寮し、留学生をサポートするレジデント・アシスタント(RA)を務め、翌年からは副寮長の大役を担った。「寮には20数人の日本人RAと約150人の留学生が住んでいます。いろいろな国の人がいますので、全く新しい価値観や意見に刺激を受けています」。

今春から外資系企業に就職する藤原さん。「医療機器の営業職でのスタートになりますが、3年後にはマーケティングを、その3年後にはグローバルマーケティングを経験したいですね。今後の自分の成長を見据え、新しいステップにチャレンジできる環境ではないかと感じています」。将来の夢はベンチャーキャピタリストとして起業すること。「海外ではベンチャー企業への投資が盛んです。日本企業のトップからも『新しい挑戦への投資が日本経済を潤す』との意見は耳にします。実際に働き出してみないと自分の能力が分かりませんが、30代ではその道に足を踏み入れたいです。さまざまなリーダー像がありますが、後ろを振り向かなくても皆がついてくるリーダーになることが理想ですね」。



GREETING WORKS

時代は変わっても
人とのつながりは普遍的なもの
野球部で全国準優勝を果たし、頑張れば夢はかなうと知った

●株式会社グリーティングワークス 代表取締役
徳丸 博之 さん —文学部 1992年卒業—

ITサービス業界で熱い視線を浴びる徳丸さん。銀行員から家業建て直しのため、印刷工場を継承し営業として「できないとは絶対言わない」スタイルで何でも引き受け、復活へと導いた。体育会野球部で培った人脈と経験をフルに生かし、「頑張れば夢はかなう」を実践している。徳丸さんが大切にしている、IT全盛の時代にも普遍的なものとは何だろうか。

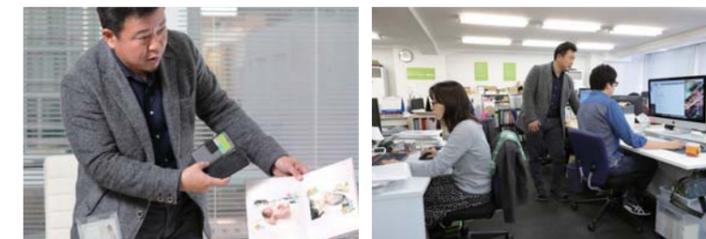
徳丸 博之—とくまる ひろゆき
■1969年大阪府四條畷市生まれ。88年明星高等学校卒。92年関西大学文学部卒。同年三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)入行。2000年に退行し、個人で事業を立ち上げる。03年、株式会社につこう社(現株式会社グリーティングワークス)を設立。04年から挨拶状のネット販売事業を始める。趣味は少年野球の指導など。

たくましい姿に人を引きつけるパワフルな笑顔。人とのつながりを何よりも大切に、ITサービス業界を先導する人物がいる。インターネットで挨拶状や年賀状を販売するグリーティングワークスの徳丸社長だ。関西IT活用企業百撰「優秀賞」受賞2回、経済産業省中小企業IT経営力大賞2013にて認定企業に登録されるなど、同社のサービス利用者数も右肩上がり。「ご利用者は現在10万人ですが、サービスの浸透と社会への貢献を考慮すると、目標は100万人です」。

印刷工場を営む両親のもと、大阪市城東区で育った。「幼少から野球少年で、高校野球では大阪府のベスト16まで勝ち進みました。地区大会で立浪義選手率いるPL学園に敗れたことは今でも覚えていますよ。学業と野球を両立できると思い、関西大学文学部に入学しました。当時のドイツ文学科は男子学生が少なかったですね。その分結束が固く、勉強以外は野球漬けの大学生活でしたが、学科の仲間と今でも仲良くしています」。関西学生野球リーグの覇者として全日本大学選手権に出場し、「6番レフト」で決勝進出に貢献した。「成績が悪い時でも起用してくれた監督をはじめ、周囲の方には感謝しかありませんでした。まさか全国で準優勝になるとは…。あきらめないで頑張れば、夢はかなうとその時に実感しました」。

大学卒業後は「野球もできて、お金の流れを勉強しながら、世の中での経営者と会える」との理由で三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)に入行。平日は他の行員同様に仕事をこなし、週末は社会人

野球に専念した。入行8年後に退行し、時代の流れを受け厳しい状況に陥っていた家業の立て直しのため、「営業マン」として無我夢中で働いた。「三和銀行の看板はもうありませんでしたが、関西大学野球部のOBや先輩、後輩の人脈を頼り、積極的に営業をしました。人材紹介から、阪神タイガースのおにぎり販売まで、「できません」とだけは絶対に言わないようにしていましたね」。何でも引き受ける徳丸さんに、本業の印刷での受注も増え始めた頃、挨拶状の販売に可能性を見いだした。「銀行員は異動の時期に挨拶状を送ります。ダイレクトメールに『元三和銀行員』と書いたところ、結構反響が良くて。全国の支店に営業をかけましたね。挨拶状のハガキをインターネットに代えたらどうなるかと思い、2004年に始めたのが「挨拶状ドットコム」です」。



「人とのつながりや思いは普遍的なもの」との信念は、IT全盛時代の今も心に響いたのだろう。写真にスマホをかざすと動画を楽しむことができる「pimory」事業は、ママさんへのプレゼントとして全国の産婦人科から商品開発の要望が舞い込むほど。「この人と一緒にいて面白いか」を採用基準の一つに、今では40人超の社員が働いている。1月には年賀状をスマホで簡単に整理できるアプリ「カシャポ」をリリースした。「変わっていくものがあれば、人間である限り変わらないものもある。時代と共に媒体は変わるけれど、礼儀礼節や思いやる気持ちは同じですから」。関西で成長させてもらった思いを胸に、社会の公器となる会社を目指す徳丸さん。当面は3年計画で利用者を50万人に、そして全国区のボーダーでもある100万人突破を目指している。